

う。もとよりこれは著者の人柄に負っている。

著者が重要な参考資料としたものに、ふだん注目されることの少ない各府県・郡市区の医師会史がある。いま各地区で医師会史の編纂が盛んであるが、きちつとした内容であればこのような横断的な利用もあり得るということをお教えられた。前述のように著者にはぜひ本書の続編を期待したい。

(長門谷 洋治)

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五一一七  
五一―一七八一、一九九六年二月発行、A5判・六五二頁、定  
価一四、八三二円〕

#### 第九十七回日本医史学会総会(札幌)記念出版

#### 北海道医史学研究会編『北海道の医療 その歩み』

本書はサブタイトルが示しているように、平成八年六月二十二日、二十三日の両日、札幌市で開かれた第九十七回日本医史学会総会の記念出版冊子である。北海道医史学研究会の皆さんが、研究会発足当時から念願を三ヶ年間でこの冊子にまとめられた熱意にまず感謝したい。

内容を、蝦夷地の医療、明治・大正期の医療、北海道における医療の専門分化、専門教育の四章に大別して二十三名の先生方が共同執筆されている。従って多彩な内容となっており、どこから読もうかと迷うほどである。

北海道は、①本州の三―四の県を合せたほどの広大な土地

を容れている。②近世末から日本史に関係した土地である。

③アイヌらの原住民が生活してきた土地である等の地域特性を有していることは言をまたない。従って本州人(アイヌからみれば和人)が渡道する以前の時代の医療を含めるということになると、どうしてもアイヌの呪術まで遡及しなくてはならないだろう。

これは言語、ユーカラを含んだ大変な課題で、医史学より文化人類学の分野に突入してしまう恐れが大である。かかる大問題は別としても、一応のアイヌの呪術より医療までの系統的研究は今後の課題として残っている。

そのような分野のことを考えていると、なるほど和人が入っていた蝦夷地の医療に関する研究は、北海道独特の課題であると云えそうだ。言ってみれば開拓時代の医療の研究である。北海道医史学研究会の方々は、これを、陣屋詰医師、痘瘡史、コレラ小史、梅毒小史、水腫病小史、薬物誌というパターンからチャレンジされて成果をあげられた。

北海道の夜明けと発展前期にあたる明治・大正期の医療については、開拓使時代の医療、北海道における西洋医学の受容(フランス医学を中心として)、函館病院、開拓時代の札幌病院(本病院としてのあゆみ)、明治初期の根室地方の医療、斉藤龍安の周辺(関寛斎との接点をめぐって)、関場不二彦と北辰病院、赤城信一など、非常に興味深いテーマが目白押しに収載されている。残念なことは時代的な配列が後先になっている点である。原稿の集まり順に編集された故なのかも知れない。

それはそれとして、赤城信一医師が登場しているのには驚いた。小生好みで恐縮であるが、函館戦争に医師が三十数名参加しているが、夫々の詳細は不明であり、旧所属、経歴などの発掘がのぞまれている（小生だけが知らないのかもしれないが）。こういう中で「赤城信一」の研究は、今後の研究の拡がりを期待させるものであり、同様の意味で「斉藤龍安の周辺」も多くの史実を教えてくれている。意外であったのは、函館におけるロシア人医師に関する記事がほとんどないことで、ロシア人医師は日本人に接しなかったということであろうか。

第三の大項目、北海道における医療の専門化については、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、麻酔科、精神科の八分野について記述されている。各科の分科確立に到るまでの先人の歩みを中心となっているが、登場する個人の記載に少々片寄りがあるように見え、ここでは各科発達の課題と共に、疾患における北海道的な病像の変異などの記載があつても良かったと思う。

紙数がなくなつてしまつて、教育にまで言及出来なかつた。今後の注文として、女医の問題、齒科の問題をあげておきたい。

本書をひもどくことによつて、北方の地域医史の視点から全国的な視野にすすむ出発点を捕えられると思うので、各科の医師、医師以外の研究者に一読するようお奨めしたい。

(中西 淳朗)

〔北海道医史学研究会刊・札幌市中央区大通西六丁目（北海道医師会内）、電話〇一一—二三三—一四三三、一九九六年六月発行、A5判、三四四頁、非売品〕

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部編

『扁鵲倉公列伝』幻雲注の翻字と研究』

司馬遷は、ある時代に生きた人物を『史記』という歴史書に映すことによつて、永遠の命を与えたのであつた。ある時には、伝説上の人物にも命を与え、生き生きと私達にその時代の世界を見せてくれる。彼によつてとらえられた時空は、一つの完成した世界という印象を感じる。

司馬遷は『史記』の「自序」の中で、「正義を保持し、人に屈せず、おのれは時機を失わずして、功名を天下にたてた人びとについては、七十の列伝を作る」（小川環ら訳『史記列伝』）と、列伝をたてる意義を述べている。さらに、「扁鵲は、医学の処方なすもののおおもとである。術数をまもり、それを明らかにし、後世の順序を定めた。倉公は、また扁鵲に近い存在である。」と、この医学にかかわる二人の伝記を述べる理由を明らかにしている。

しかし、この「扁鵲倉公列伝」は古来難解であつた。今なお、この列伝の理解は完全ではない。小川らは『史記列伝』（岩波文庫）を翻訳するのに、「扁鵲倉公列伝」と「亀策列伝」は正確に訳しうる自信がないとして訳していない。